

分裂文の意味と構造

— 古代語と九州方言の接点 —

吉 村 紀 子
仁 科 明

本稿は、現代共通語の事実だけでは解決することが困難な問題について、日本語史研究の知見と方言資料のデータの両面から光を当て、理解の手がかりを得ようとする試みである。具体的には、分裂文の意味と構造、特に形態素「の」の素性に関する分析にかかわる問題を取りあげる。分裂文の分析への貢献はもちろんであるが、このような議論が、現代共通語の統語的分析への、歴史的データと方言データの利用についてのテストケースとなればと考える。

1. 「の」と分裂文

分裂文とは、現代共通語では、例えば(1)のようなものを指す¹。

- (1)a. 太郎がニューヨークで会ったのは松井選手だ。
b. 太郎が松井選手に会ったのはニューヨークだ。

このような分裂文で、助詞「は」に上接する、いわゆる「の節」について、(2)に示すような2つの構造を持ち得るとする分析がある (Hoji 1987)。

- (2)a. $[_{DP} [_{IP} \dots \text{pro}_i \dots V] \text{の}]$ -は $[_{\text{Focus DP}} DP]_i$ だ。(Hoji 1987)
b. $[_{CP} \text{OP}_i [_{IP} \dots t_i \dots V] \text{の}]$ -は $[_{\text{Focus DP}} DP]_i$ だ。

(2)に示される2つの構造の違いは、(2a)では「の」が基底生成されているのに対し、(2b)では「の節」に「空の演算子」(OP=null operator)の移動を含む、という点にある。「の」が代名詞だとする理解(=2a)と「の」が補文標識だとする理解(=2b)である、と整理することが出来よう。(2)は、現代共通語の分裂文に関して、このような二つの異なる構造理解が、ともに可能であるという提案なのである。

(2)を支持する根拠として、Hoji & Ueyama (1998) は、例えば(3)~(4)のよ

うな例を挙げている²。

(3) a. [[_{DP} [_{IPe_i} pro_j 食べた] 人]_i] が食中毒になった] の] は [_{DP} この饅頭]_i] だ。

b.*[[_{DP} [_{IPe_i} t_j 食べた] 人]_i] が食中毒をなつた] の] は [_{DP} この饅頭を]_i] だ。

(4) a. [[メリーが[あの晩ジョンがそこ_iに行ったと]言っていた] の] は
[_{DP} この劇場]_i] だ。

b.*[[メリーが[あの晩ジョンがそこ_iに行ったと]言っていた] の] は
[_{PP} この劇場に]_i] だ。

(Hoji & Ueyama 1998: (26b) (27b))

つまり、焦点の名詞句が格助詞や後置詞を伴わない場合、分裂文は「下接の条件」(Ross 1967, Chomsky 1981, 1986) に違反せず(3a)、また再叙代名詞を容認する(4a)。この事実から、OPの痕跡_tを持つCP構造(2b)に加えて、ゼロ代名詞proを持つDP構造(2a)をも可能であると結論したのである。

しかしながら、上記の例から分かるように、現代共通語では、どちらの構造をとった場合でも同一の形態素「の」が用いられるため、(2)の仮説—分裂文に現れる「の」は代名詞あるいは補文標識である、すなわち、「の節」がDP(名詞句)もしくはCP(補文節)である—の妥当性について検証することは困難である。

そこで、本論では、(2)の分析の妥当性、つまり、形態素「の」の意味・範疇に関する疑問を解く一助として、特に古代日本語の「連体形準体法」(現代共通語の「の」にあたる位置に音形をもった形態素が現れない構造)に関する先行研究の研究成果と、例えば「の」の代わりに2つの異なる形態素を用いる九州八代方言の事実との接点からこの問題を考えてみることにしたい。

2. 古代日本語—連体形準体法

問題の「の」は伝統的に準体助詞と呼ばれるものであるが、その出現は、信太(1976)などによれば、室町時代末期、あるいは江戸時代初期頃と推定されている。それ以前の日本語(古代の日本語)では、動詞句に下接して名詞句を構成する、現代語の「の」のような形態素は現れなかった。つまり、動詞の連体形がそのまま名詞句の項として機能していたのである。これが、いわゆる

「活用語連体形の準体法」(「準体句」)³である。

2.1 石垣(1955) — 「形状性名詞句」・「作用性名詞句」

「準体句」に関する考察でまず着目したいものに、石垣(1955)の研究がある。特に、石垣が、準体句を、形状性名詞句と作用性名詞句とに類別したことは、非常に興味深い。例えば、(5a)が形状性名詞句、一方(5b)が作用性名詞句である。

- (5)a. [友の遠方より訪れたる]をもてなす。
 b. [友の遠方より訪れたる]を喜ぶ。

目的格「を」に上接する準体句は、(5a)では、「友が遠くから訪ねてきてくれた(者)」を、他方(5b)では、「友が遠くから訪ねてきてくれた(事)」を意味する。すなわち石垣は、形状性名詞句が「もの」に、作用性名詞句が「こと」に、それぞれ対応するものであると分析したわけである^{4,5}。

古代日本語の例では、例えば、(6a)は形状性名詞句、(6b)は作用性名詞句である⁶。

- (6)a. [かの承香殿の前の松に雪のふりかゝりたりける]を折りて、
 (大和物語 303)
 b. 長月になりて、[桃園の宮に渡りたまひぬる]を聞きて、
 (源氏・朝顔 2-459)

(6a)の場合、「雪が降り積もっている松(の枝)」という解釈から「もの」に、一方(6b)の場合、「桃園の宮殿にお移りになった事」という意味で「こと」に、それぞれ対応すると考えることができる。

このような意味上の違い⁷に加えて、石垣は形状性名詞句と作用性名詞句の間には文法形態上、次のようなアスペクト制限があると主張した。

- (7)a. [主部・形状性名詞句形状性用言] + [述語形状性用言／作用性用言]
 b. [主部・作用性名詞句形状性用言／作用性用言] + [述語形状性用言]
 (石垣 1955 : 233)

「形状性用言」が[+状態]、一方「作用性用言」は[-状態]であると考えたと

(近藤2002: 353 注13)⁸、準体句が「もの」の場合、述語にはアスペクト制限がないが(7a)、それが「こと」の場合、述語が必ず[+状態]でなければならないという制限が生じる(7b)とした。例えば、前出の(6a)は(7a)の一例で、主部の用言は形状性であるが、述語は作用性用言となっている。また、主部と述語の用言が両者とも形状性用言である(8a)の例や作用性名詞句の用言が作用性用言、述語の用言が形状性用言である(8b)の例が見られる。

- (8)a. [荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる]、たとしへなく木暗し。
(源氏・夕顔 1-233)
- b. [手たたけばやまびこの答ふる]、いとうるさし。(源氏・夕顔 5-123)

つまり、石垣の分析では、準体句の用言か述部の用言か少なくとも何れか一方は必ず形状性用言(つまり[+状態性])でなければならないことになる^{9, 10}。

2.2 近藤(2000) — 「同格準体」

近藤(2000)は、前節に見た石垣の議論を踏まえて、準体句を「同一名詞準体」(あるいは「形状性準体」と「同格準体」(あるいは「作用性準体」とに類別し、これら2種類の準体の間には中古語においてすでに統語論的な違いがあったと指摘した。つまり、近藤によれば、前者は原則として被修飾名詞が存在しない無主名詞関係節であり、「もの」・「ひと」・「ところ」を意味するのに対し、後者は原則として文自体を「こと」として解釈する名詞節である。例えば、次のような対比が見られる。

- (9)a. 硯のあたりにぎははしく、[草子どもとり散らしける]を取りつつ
見たまふ。(源氏・初音 3-143)
- b. まして五節の君は、[綱手ひき過ぐる]も口惜しきに、
(源氏・須磨 2-195)

(9a)は同一名詞準体の例で、「取り散らかっている草子(を取って)」という意味の主部内在関係節であり¹¹、(9b)は同格準体の例で、「素通りすること(も残念に思って)」という名詞節の解釈になる。

その上で、近藤(1992、2000:第7章第4節)は、中古語の分裂文が、石垣の、「形状性名詞句(同一名詞準体)の用言は[+状態]でなければならない」

という制限に対する例外となることを指摘した。

(10)a. [たけきものゝふのこゝろをもなぐさむる]は哥なり。

(古今和歌集仮名序 93)

b. [...と聞こえたまふ]は、いと鼻赤き御兄なりけり。

(源氏・初音 3-148)

(10a)の場合、分裂文の主語を現代語に訳すとすれば、「勇ましい武士の心をなぐさめる(もの)」となる。つまり、同一名詞準体の解釈がふさわしいように見える。しかしながら、述語用言は「なぐさむる」で、[-状態]であるため、石垣法則(7a)の例外となる。同様に、(10b)の場合、分裂文の主語は「申し上げなさる(ひと)」とする同一名詞準体の解釈であるが、述語用言は「聞こえたまふ」([-状態])となっており、これまた例外となっている。また、近藤は、同様の問題が分裂文以外にも見られることも指摘している。

(11)a. [これらをひとのわらふ]をきゝて、

(土佐 36)

b. [賓頭盧の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたる]をとりて、

(竹取 34)

「これらをひとのわらふ」を「笑う(声)」として理解することが可能であり、その解釈では、同一名詞準体であると考えられることになるが、述語用言は[-状態]である。また、[賓頭盧の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたる]は現代語に直すと、「賓頭盧(仏像)の前にある鉢に真黒に墨の付いた(もの)」と解釈できる同一名詞準体(主部内在関係節)であるが、述語用言は「墨つきたる」([-状態])である。

さらに、近藤は、現代共通語の分裂文について次のような観察を示した。

(12)a. 太郎がけんかしたのは次郎だ。

b. 太郎がけんかしたのは次郎とだ。

c. *太郎がけんかしたひとは次郎とだ。

(近藤 2000:361 (25)・(26)・(27))

分裂文の主語を「ひと」・「もの」であるとする、(12c)と同様に、(12b)も事実と反して非文であるべきである。つまり、分裂文の主語を同一名詞準体とするのであれば、(12b)のような述語に後置詞がつく分裂文の正当性をうまく説明できないわけである。

以上のような論点に基づき、近藤（2000）は、まず、「現代語の分裂文の主語は同格連体の「の」であると考えの方がよいであろう」（p. 362）と結論し、その上で、中古語の分裂文の分裂文についても現代語のそれと類似していることから、「中古語の分裂文も同格準体を主語とする」（p. 365）と主張した。つまり、近藤のこの結論が正当なものであるとすると、分裂文の主語は、名詞節の「こと節」（作用性名詞句）と見なされる。その結果、石垣の法則の例外と見えたものは解消されてしまうことになる¹²。

2.3 金水（2001） — [準体句 [……]pro]

金水（2001）は、現代語の「の節」の「の」は「もの」と意味範疇的に一致する名詞性を持っているのに対し、古代語の準体句にはそのような特質が存在しないことを指摘した。例えば、現代語の例文(13)の各例を見ると、問題の「の」は「尊敬」・「場所」・「時間」の意味をあらわすことができないことが分かる。

- (13)a. (学会で) [随分太った] *の/先生が入っていらっしやった。 [尊敬]
 b. [田中がいる] *の/ところに山田も来た。 [場所]
 c. [田中がパーティーに来た] *の/ときに山田は来なかった。 [時間]
 (金水 2000: p. 2(9)～(11))

それに対して、例文(14)から分かるように、古代語の準体句にはこのような制約はなく、「尊敬」・「場所」・「時間」を意味することができるのである。

- (14)a. [もの思ひ知りたまふ]は、さま容貌などのめでたかりしこと、
 心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、
 今ぞ思し出づる。 (源氏・桐壺 1-101) [尊敬]
 b. 愛宕といふ所に、[いといかめしうその作法したる]に、
 おはし着きたる心地、いかばかりかはありけむ。
 (源氏・桐壺 1-100) [場所・時間]
 c. [月のあかき]に、屋形なき車のあひたる。
 (枕草子 93) [時間]

例文の準体句を現代語訳にすると、それぞれ「物事をご存知の方」(14a)、「と

でもおごそかな（葬式の）作法をしている時・場所」（14b）、「月が明るい時間」（14c）という解釈になり、意味的に問題のない文である。

古代語の準体句と同様に、現代日本語の分裂文も「尊敬」・「場所」・「時間」を表すことができる点が着目される（Matsuda 2000）。

- (15)a. [先ほどこここにすわっていらっしゃたの]は私の先生だ。 [尊敬]
 b. [太郎が働いているの]は東京だ。 [場所]
 c. [父が出張から帰ってきたの]は真夜中だ。 [時間]

(15)の例文はそれぞれ意味的におかしくない文である。

さらに、金水（2001）の指摘する通り、「もの」の「の」(13)が「尊敬」・「場所」・「時間」を表すことができないのに対し、準体句(14)と分裂文の「の節」の「の」(15)はそれが可能である点は、指示詞「これ・それ・あれ」が具体的に「ひと」・「ところ」・「とき」をあらわす場合(16)と、そのような具体的な意味を指し示さない場合(17)との間に生じるパラダイムにまったく類似するものである。

- (16)a. *これ・*あれ/この方・あの方にお会いしました。 [尊敬]
 b. 山田さんは*これ・*あれ/ここに・あそこに居る。 [場所]
 c. 田中さんは*これ・*あれ/その時・あの時に来なかった。 [時間]
- (17)a. これ・あれは私の先生だ。 [尊敬]
 b. これ・あれは東京だ。 [場所]
 c. これ・あれは3時だ。 [時間]

つまり、古代語の準体句と現代語の分裂文の主語は特に意味を持たない指示詞と並行的なものであると判断できる。

以上の点から、金水（2001:p. 2）は、古代語の準体句の主部に全く意味的に制約がない、無形の代名詞proを想定する可能性を示唆している。この案に沿って、例えば、(14c)は、次のような構造を持つことになる。

- (18) [[月のあかき]pro]に、屋形なき車のあひたる。

さらにこの見方に沿って考えれば、現代語の分裂文の「の節」も同じく名詞性を持たないわけだから、この「の節」の「の」に無形代名詞 pro が相当すると考えることも可能であろう¹³。

(19)a. 太郎が夕食に食べたのは寿司だ。

b. [[太郎が夕食に_{pro}食べた] pro / (の)] は [寿司]_iだ。

この場合、(19b)はHoji (1987) が提案した現代語の分裂文の構造(2a)に対応するものとなっている¹⁴。

2.4 まとめ

以上、本章で述べてきたことを整理しておけば、次のようになる。

まず、石垣 (1955) は、連体形準体句について、[状態性]の観点から形状性名詞句と作用性名詞とに区別した (2.1)。石垣の分析をふまえて、近藤 (2000) は、議論を準体句と現代語の分裂文に拡大し、同格準体の名詞節 (石垣風にいえば作用性名詞句) であると理解している (2.2)。しかし、金水 (2001) では、古代語の同一名詞準体句の主部にproを生成する分析が示唆されており、その示唆に従えば、近藤の主張に対して、分裂文主語名詞句を同一名詞準体の構造で理解することも可能である (2.3)。

3. 熊本八代方言の分裂文

それでは次に、分裂文 (の「の節」) をめぐる問題について、方言資料の側から見てみることにしよう。ここで取り上げるのは、熊本県の南部に位置する八代地方、より厳密には、八代郡の南部地域 (宮原町・鏡町・竜北町) において話されている方言である。最初に述べておけば、現代共通語と異なり、この八代方言では「の節」の「の」の代わりに、「つ」と「と」のいずれかを用いる。例えば、前出の例(1)は以下のように言うことができる¹⁵。

(20)a. [[太郎のニューヨークで会わした]つ/と/*の]は松井選手だった (ばい)。

b. [[太郎の松井選手に会わした]つ/と/*の]はニューヨークだった (ばい)。

3.1 「つ」と「と」

まず、吉村 (2000) に沿って、八代方言の「つ」と「と」の基本的な用法を概観することから始めたい。

次の(21)によって、「もの」を表す「の」に対応するのは、「と」ではなく、「つ」であることが分かる^{16, 17}。(21a)は「(何か) 赤い物」、(21b)は「太郎の物(本)」と、それぞれ解釈できるだろう。

- (21)a. [赤かつ/*と]ば食べた¹⁸。
 (赤いのを食べた。)
- b. こん本は[太郎のつ/*と]ばい。
 (この本は太郎のだ。)

同様に、目的格助詞「ば」に上接する関係節の「の」に対応する部分にも、「つ」が用いられて「と」は用いられない。次の(22a)(22b)では、「つ」を用いて、それぞれ「皿の上にあった物」・「転校して来た者」と理解される関係節が構成されていることが確認できよう。

- (22)a. 太郎の[皿ん上んあつたつ/*と]ば食わした。
 (太郎が[皿の上にあつたの]を食べた。)
- b. あん子は[4月に転校してきたつ/*と]とようケンカする。
 (あの子供は[4月に転校してきたの]とよくケンカをする。)

以上のように、熊本八代方言では「もの」や「ひと」を表す(つまり、石垣の形状性名詞句を構成する)のには「つ」を用い、「と」を使用しないわけである。

一方、「こと」を表す場合(石垣の作用性名詞句あるいは近藤の同格準体を構成する場合)は、どうであろうか。まず、次の(23a~c)には、「遊びに来た事」・「トラックが通る事」¹⁹・「富士山を見ることが出来なかった事」を、それぞれ意味する名詞節が含まれるが、いずれも「と」だけが許容される。共通語の「の」が「こと」を表し節となる場合、熊本八代方言では「つ」を用いると非文になってしまうのである。

- (23)a. [友達ん北海道から遊びにこらしたと/*つ]はだいぶん嬉しかった。
 ([友達が北海道から遊びに来てくれたの]はとても嬉しかった。)
- b. ここん交差点は、[トラックの通つ/*と]ん、だいぶうるさか。
 (ここの交差点は、[トラックが通るの]が非常にうるさい。)
- c. (せっかく静岡に行ったとに) [富士山の見れんつ/*と]はほんなこて残念だった(ばい)。

((せっかく静岡にいったのに)[富士山が見られなかったの]は本当に残念だった。)

(23)と同様の対比は、「待つ」・「手伝う」のような動詞の目的格に立つ名詞節にも見られる。つまり、「完成する事」(24a)・「切る事」(24b)と解釈できるものは、「つ節」とはならず、「と節」でなければならない。

- (24)a. [九州新幹線の来年完成すと/*つ]ばみんな待っとらす (ばい)。
 ([九州新幹線が来年完成するの]をみんな待っている。)
- b. [父ちゃんの木ば切らすと/*つ]ば手伝ったけん、(疲れたばい)。
 ([父親が木を切るの]を手伝ったので、(疲れた)。

「知る」や「聞く」のような感覚動詞に上接する「の節」は「こと」を意味すると考えられるが、これに対応するものは、以上を踏まえるならば、熊本八代方言では「と節」になることが予期されるだろう。果たして、(25)に示すように、「宝くじに当たった事」・「けがが軽い事」・「弾いていた事」に相応する名詞節は「と節」であり、「つ節」は許容されないのである。

- (25)a. (新聞ば見て) [ほんなこて宝くじにあたと/*つ]ば知った。
 ((新聞を見て) [本当に宝くじに当たったの]を知った。)
- b. [兄ちゃんのけがん軽かと/*つ]ば聞いて、(ほっとした)。
 ([兄のけがが軽いの]を聞いて、(ほっとした)。
- c. 先生の[生徒ん教室でピアノば弾いとと/*つ]ば聞いとった。
 (先生が[生徒が教室でピアノを弾いていたの]を聞いていた。)

また、次に挙げる (26)は、国立国語研究所発行の「方言文法全国地図第1集」(1989)に報告されているものであるが、共通語の「の節」は熊本八代方言では「と節」となっており、(23)～(25)で見た結果を補強するものとなっている。

- (26)a. (お前は東京に) 行くのではないか (方言文法地図17)
 b. -tozja
 c. (あは東京に) 行くとじゃあなかね (熊本八代方言)²⁰
- (27)a. (車が有ると町に) 行くのに (便利だ) (方言文法全国地図18)
 b. -toni
 c. (車んあつと町に) 行くとん (便利たい) (熊本八代方言)

つまり、石垣の作用性名詞句、あるいは近藤の同格名詞準体を構成する「の」に対応する部分には、「と」が用いられるのである。

以上、熊本八代方言では、現代共通語において「もの」(名詞)を意味する「の」は「つ」に、一方、「こと」(節)を意味する「の」は「と」に、それぞれ対応していることが確認された。

3.2 構造分析—「と節」

前節の結論を踏まえて、熊本八代方言の分裂文の構造について見直してみることにしよう。まず、本章の初めに述べたように、(20)では、「つ」と「と」が可能であった。

- (20) a. [[太郎のニューヨークで会わした]つ／と／*の]は松井選手だった(ばい)。
 b. [[太郎の松井選手に会わした]つ／と／*の]はニューヨークだった(ばい)。

また、以下の対比においても同様な結果が得られる。

- (28) a. [[ニューヨークで観戦した]つ／と]はヤンキース戦だったばい。
 ([ニューヨークで観戦したの]はヤンキース戦だ。)
 b. [[おじさんの宅配便ば送らした]つ／と]は上海だったばい。
 ([おじさんが宅配便を送ったの]は上海だった。)
 c. [[あなたが静岡駅でばったり会った]つ／と]は誰だったかい。
 ([あなたが静岡駅でばったり会ったの]は誰でしたか。)

分裂文の焦点となっている名詞句は、「ヤンキース戦」は「見る」の直接目的語(28a)、「上海」は「送る」の間接目的語(28b)、「誰」は「会う」の前置詞句目的語(28c)のように異なっているが、いずれの文においても「つ」、あるいは「と」が可能である。

ところが、次の(29)を見てみると、分裂文が常に「つ」と「と」を許容するとは限らないことが明らかになってくる。

- (29) a. [[ニューヨークで観戦した]*つ／と]は[ヤンキース戦ば]だった。
 (ニューヨークで観戦したのはヤンキース戦をだ。)
 b. [[おじさんの宅配便ば送らした]*つ／と]は[上海へ]だった(ばい)。
 (おじさんが宅配便を送ったのは上海へだ。)

- c. [[あなたが静岡駅でばったり会った]*つ/と]は[誰に]だったかい。
(あなたが静岡駅でばったり会ったのは誰にでしたか。)

これらの分裂文は(28)とは異なり、名詞に格助詞、あるいは後置詞が付いたもの(「ヤンキース戦ば」・「上海へ」・「誰に」)が分裂文の焦点となっている。そして、その際には、「つ」は不可能になり、「と」が用いられなければならないという興味深い対比が生じている。同様の結果は、(30)の各例においても観察できる²¹。分裂文の焦点が、後置詞を伴った名詞であるため、「つ」が許容されない結果となっているのである。

- (30)a. [あん男んけんかした*つ/と [は [(けんかの強か) 太郎と]ばい。
(あの男がけんかしたのは(ケンカの強い)太郎とだ。)
- b. [花ちゃんのプレゼントばもらわした*つ/と]は[太郎から]ばい。
(花ちゃんがプレゼントをもらったのは太郎からだ。)

3.3 まとめ

第3章での観察(熊本八代方言の「つ」「と」の用法)を整理しておこう。

まず、現代共通語の「の」に対応するものとして、熊本八代方言では「つ」と「と」が用いられる。この内、「つ」は「ひと」・「もの」に、一方「と」は「こと」にそれぞれ対応する形で使用される。つまり、石垣の形状性名詞句には「つ」が、作用性名詞句には「と」が用いられる(以上3.1)。分裂文の主語には「つ」と「と」が可能であるが、その焦点となる名詞(句)が格助詞や後置詞を伴う場合だけは「と」のみが可能である(3.2)。

4. 現代日本語の分裂文

本章では、前章の分析結果—熊本八代方言の分裂文はその主語に「つ」と「と」が可能であること—に基づき、ふたたび現代共通語の分裂文に関して、意味と構造の両側面から考えてみたい。

4.1 両義性

まず、意味解釈について見てみよう。八代方言の分裂文で、「の節」の「の」に対応する部分に「つ」と「と」のいずれもが可能であるという事実は、一般的に見て、分裂文に2通りの解釈が可能であることを示唆している。例えば、(1a)を例にして説明すると、次の2つの文が可能となることになろう。

- (31)a. [[太郎がニューヨークで会った]人]は松井選手だった。
 b. [[太郎がニューヨークで会った]こと]は松井選手だった。

「ことは」を「～（こと）と言えよ」のように言い換えてもよい²²。また、他の分裂文についても同様な解釈が得られる²³。

- (32)a. [[ニューヨークで観戦した]物/ゲーム]はヤンキース戦だった。
 b. [[ニューヨークで観戦した]こと]は（と言えよ）、（それは）
 [ヤンキース戦]だった。

- (33)a. [[あなたが静岡駅でばったり会った]人]は [誰]だったのですか。
 b. [[あなたが静岡駅でばったり会った]こと]は（と言えよ）、
 （それは）[誰]だったのですか。

上記の文解釈が妥当なものであると前提すれば、現代日本語の分裂文の主題部「の節」も、意味の違いから、形状性名詞句と作用性名詞句とに分類できることになる²⁴。加えて、問題の「の節」が熊本八代方言の「と節」のように一つまり(32b)・(33b)のように一、解釈できるとすると、上の如く、分裂文の主語に「それ」を補っても問題は生じないようである。金水（2001）は、(15)や(17)の例に関連して「日本語の分裂文は特定の意味を持たない指示詞と並行なものである」と述べていた(2.3)。本節に見た事実を踏まえるならば、金水（2001）の主張は、名詞節（作用性名詞句）の「の節」についての分析であったと理解することができよう。

4.2 DPとCP

前節を踏まえて、構造について述べる。分裂文が2通りの解釈を許容するという事実は、それが異なる2つの構造を有するという可能性を示唆するである

う。そしてこの可能性は、熊本八代方言で、共通語の分裂文の「の」に対応する部分に、「つ」と「と」の両形式をとる場合が存在したという事実から考えても全く問題のないものである。すなわち、一つは「もの」に当たる「の」（八代方言では「つ」）を主要部とした名詞句（DP）の構造、もう一つは「こと」相当の「の」（八代方言では「と」）によってまとまる名詞節（CP）の構造である。

この提案を概略的に図式化すると、次のようになるであろう²⁵。

(34)a. $[_{DP} [\dots ec_i \dots V] \text{の} (\text{もの})] \text{-は} [_{\text{Focus DP}}]_i \text{だ。}$

b. $[_{CP} OP_i [\dots ec_i \dots V] \text{の} (\text{こと})] \text{-は} [_{\text{Focus DP}}]_i \text{だ。}$

(34a)の場合には、「の」の範疇は名詞（「もの」・「ひと」）であると考えられている。(18)について金水（2001）が提案していたように、古代語ではこれが無形代名詞proに当たると考えてもよいであろう。それに対して(34b)の場合、「の」の範疇は補文標識であると考えられている。この（「こと」と解される）「の」を補文標識として見なす考えはこれまでの研究（例えば、井上1976、外池1990）において提案されている仮説であり、ここでの分析によって確認されたことになる。なお、(34b)の構造は基底構造、もしくは空演算子の移動によって生成された構造、のいずれをも想定できるものであると考える²⁶。

5. 結 語

本稿では日本語の分裂文について次の点を明らかにしたことになる。まず、仮説(2)は原則的には妥当な提案であることが分かったが、分裂文の現象をよりの確に把握するためには、(34)のように想定する方がより適切な分析であると考えられること、次に、(34)が正しい分析であるとすれば、分裂文「の節」の「の」は名詞でも補文標識でもあり得ること、である。

石垣（1955）が提案した古代日本語の連体形準体句の分析、特に形状名詞句と作用性名詞句の意味論上の区別（あるいは近藤（2000）の同一名詞準体と同格準体の区別）は、古代語から現代語に至る間も変化することなく存在してきているが、その区別は、分裂文構造を考える際にも重要なものと考えられた。一方、「の」にあたる部分に「つ」「と」という二つの形式を有している熊本八代方言の事実は、(34)を仮定するに際してのサポートとなった。歴史的研究の

蓄積や方言のデータの分析が、現代語の意味・統語研究に対して貢献をなし得ることの具体例となりえたのではないかと考える。

注

*本論は、日本言語学会第126回大会（2003年6月22日 青山学院大学）において発表した草稿（吉村紀子・仁科明「歴史・方言データからみた分裂文の意味と構造」）に加筆したものである。大会当日質問やコメントをいただいた参加者に感謝したい。なお、ここで提示している方言資料は、参考文献にあげた吉村（2000）の内容の一部に基づく。

- 1 (1a, b)のような文を擬似分裂文 (pseudo-cleft sentence) とし、(ia, b) のような分裂文 (cleft sentence) と区別する考え（例えば、黒田1999）があるが、本稿では特に注記しない限り両者を区別しないものとする。
 - (i) a. 太郎がニューヨークで会ったのは松井選手にだ。
 - b. 太郎が松井選手に会ったのはニューヨークでだ。
- 2 Hoji & Ueyama (1998、第2節) では、(2)の仮説をさらに支持する証拠として、再構築 (reconstruction) や弱交差 (weak crossover) に関する影響の有無についても同様の対比が観察できることを指摘している。
- 3 「連体形準体法」によって構成される名詞句が「準体句」である。以下、この用語を用いる。
- 4 石垣 (1955:221) では、形状性名詞句(5a)の「友の」の「の」は英独仏語の関係代名詞に類する働きをなし、従って、この「の」は主格助詞でなく寧ろ属格の助詞と言うべきであると述べ、関係代名詞句的「の」助詞と称した。
- 5 参考までに補足すると、原田 (1970) は「と節」と異なり、「の節」(石垣の作用性名詞句を指す) は「その節の内容が話し手により事実であるとされることが前提になっている」と考えた。一方、井上 (1976:254-255) は、「と」を取ると非叙実述語になり、「の」を取ると叙実述語になるものが多いと観察した。
- 6 古典作品の引用は、源氏物語は小学館古典文学全集（巻名の後の数字は全集の巻・頁）に、それ以外は岩波古典文学大系（作品名の後の数字は大系の頁）に、それぞれ依った。
- 7 なぜこのような違いが生じるのかについて、石垣 (1955:226) は助詞「の」の2つの異なる特性—所属を表すものと同格的なもの—によるものであるとした。
- 8 石垣 (1955:217) は、「形状性用言」は活用語の終止形がイの韻に終るもの、一方「作用性用言」はそれがウの韻に終るものであると見なした。
- 9 石垣 (1955:236) 「作用性用言反撥の法則」。
- 10 以上のような石垣の準体句の分析に対して、近藤 (2000:309-311) は、[±状態性]という基準にもとづく分析よりも、「能格性」(影山1993) を軸にした分析の方がより妥当なものであると主張する。その根拠としては、例えば、[+状態性]とは言いがたい非対格自動詞（「見ゆ」・「聞こゆ」）も準体主語の述語となりうる点や、名詞節の準体句が自動詞の主語と他動詞の目的語に共通して意味的に「対象」を指すものである点を挙げている。

- 11 同様に、上の(6a)や(8a)も主部内在関係節の例である。なお、現代日本語の主部内在関係節の研究については、Hoshi (1995)、黒田 (1992、1998、1999)、三原(1994a、1994b)、坪本 (1991、1995、1999)、Murasugi (1992、1994、1996) 参照。
- 12 この結論に沿って考えると、分裂文は(2a)の可能性は無くなり、(2b)の構造のみが存在する結果となってしまふ。ただし、以下の3節の分析を参照。また、この結論は(9a)、(11b)のような主部内在関係節の構造についても補文節の構造のみを可能性として示唆することになってしまふように思われる。今後の再検証が待たれる。
- 13 金水 (2001) の資料では、この可能性について明示的に論じてはいないが、議論の流れから考えると、現代語の分裂文の「の」が無形代名詞proに当たると想定できることは暗示的に示唆されていると思われる。ただし、注14。
- 14 しかし一方で、金水 (1995:84) では、「の」が日本語の歴史において一貫して補文を示すための方略の一つであると思なすことができるので、形状性名詞句の場合も作用性名詞句の場合も「の」を補文標識として統一的に見る見方も成り立つ余地があると述べている。
- 15 「ばい」は「ワタシ」と関係が深い文末詞であると言われている (藤原 2000:797-798)。以下、例文の不自然さを避けるために必要な場合使用することにする。
- 16 以下、() に例文の共通語訳を示すことにする。
- 17 八代方言話者の福田稔氏よりご指摘いただいた通り、(21a)は「赤かっぱ食べた」とも言える。また、同氏より、40歳代の八代方言話者にとって「赤かとは食べた」は言わないが、聞いて理解できる文であるというコメントをいただいた。もしこのことが若い年代の熊本方言話者の間に傾向として見られるとすると、「と」の勢力拡大という言語変化がゆるやかに始まっていると考えられる。ただし、以下の(26)を参照。
- 18 八代方言では、「の」が主格助詞、「ば」が対格助詞である。詳細は吉村 (1994) 参照。
- 19 ここでは主部内在関係節の解釈を意図しない。
- 20 以下の(26)・(27)において、(a)と(b)は調査結果から引用したものであるが、一方(c)は熊本八代方言において全文をどのように言うのかを吉村が具体的に示したものである。
- 21 (30a)は近藤 (2000) の(12)に類似する例文である。ここでの熊本八代方言の結果は近藤の結論「名詞節」と一致するものである。
- 22 このように考えると、「は」に上接するものが名詞句か名詞節かの違いはあるにせよ、分裂文の主語の解釈は、通常の主題文のそれとあまり相違がないものとなってしまふように思える。この点については稿を改めて取り上げたい。
- 23 (32)は(29a, c)を共通語に直したものである。
- 24 ただし、以下では後者を名詞節として扱うことになる。
- 25 ここでは、分裂文の主語に生じる空所を便宜上暫定的にec (=empty category)と記す。
- 26 つまり、(34b)については、以下のような2つの構造が可能であると考えられる。

- (i) a. $[_{CP} [\dots \text{pro}_i \dots V] \text{の(こと)}] \text{-は} [_{\text{Focus DP}}]_i \text{だ。}$
 b. $[_{CP} \text{OP}_i [\dots t_i \dots V] \text{の(こと)}] \text{-は} [_{\text{Focus DP}}]_i \text{だ。}$

助詞「は」に上接する名詞節は基底生成のproを含む構造(ia)、あるいは空演算子が移動し

た痕跡(t)を含む構造(ib)、のいずれかである可能性を示唆している。したがって、(ia)を想定しなかったHoji (1987) (2b)とは異なる提案である。

詳細は省略するが、両案の違いと関連して(ii)のような例文が存在する。

(ii) [[_{IPe1} pro_j 食べた]人]の病気になってしまわした]つ/と]は[この饅頭]_iたい。

「つ」と「と」が可能である。焦点である「この饅頭」が分裂文の主語の関係節に生じていることを考えると、問題の名詞節がもし(2b)にあるように空演算子移動によって生成される構造(ib)だけであるとすると、(ii)の文法性を説明できなくなってしまう。

参考文献

- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge: MIT Press.
- 藤原与一. 2000. 『日本語方言文法』武蔵野書院.
- 原田信一. 1970. 「補文標識の『の』」 関東学院高校放送部OB同人誌『季刊変貌』. (福井直樹 (編) 『シンタクスと意味—原田信一言語学論文選集』 2000. 大修館書店. 439-447).
- Hoji, H. 1987. “Japanese Clefts and Reconstruction/Chain Binding Effects,” a talk presented at WCCFL VI held at the University of Arizona.
- Hoji, H. & A. Ueyama. 1998. “Resumption in Japanese,” ms. University of Southern California.
- Hoshi, K. 1995. *Structural and Interpretive Aspects of Head-Internal and Head-External Relative Clauses*, Ph. D. dissertation, University of Rochester.
- 石垣謙二. 1955. 『助詞の歴史的研究』岩波書店.
- 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 上—統語構造を中心に—』大修館書店.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 金水 敏. 1995. 「日本語史からみた助詞」『言語』24巻11号. 大修館書店. 78-84.
- 金水 敏. 1996. 「歴史的にみた『格助詞』の機能」日本認知科学会第13回大会発表資料.
- 金水 敏. 2001. 「助詞から見た日本語文法の歴史」文法学研究会第3回集中講義資料.
- Kuroda, S-Y. 1992. *Japanese Syntax and Semantics*. Dordrecht: Kluwer.
- 黒田成幸. 1998. 「主部内在関係節」平野・中村(編)『言語の内在と外在』1-79. 東北大学文学部.
- 黒田成幸. 1999. 「主部内在関係節」黒田・中村(編)『ことばの核と周縁—日本

- 語と英語の間』くろしお出版. 27-103.
- 国立国語研究所. 1989. 『方言文法全国地図』第1集.
- 近藤康弘. 2000. 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- Matsuda, Y. 2000. "An Asymmetry in Copular Sentences: Evidence from Japanese Complex Nominals Headed by *no*," 『言語研究』117. 3-32.
- 三原健一. 1994a. 『日本語の統語構造』松柏社.
- 三原健一. 1994b. 「いわゆる主要部内在型関係節について」『日本語学』13巻8号. 明治書院. 80-92.
- Murasugi, K. 1992. "Two Notes on Head-Internal Relative Clauses," 『金城大学論集 (英米文学編)』第34号. 233-242.
- Murasugi, K. 1994. "Head-Internal Relative Clauses as Adjunct Pure Complex NPs," in *Syntactic and Diachronic Approaches to Language: A Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of His Sixtieth Birthday*. Liber Press. 425-437.
- Murasugi, K. 1996. "Head-Internal Relative Clauses and the Pro-Drop Parameter," 『金城大学論集』37. 327-350.
- 信太知子. 1976. 「準体助詞「の」の活用語承接について—連体形準体法の消滅との関連—」『立正女子大國文』5号. 16-25.
- Ross, J. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Ph. D. dissertation, MIT.
- 外池滋生. 1990. 「「の」の論理形式——「は、が、も」の論理形式に続いて」『明治学院論叢』447号. 69-99.
- 坪本篤朗. 1991. 「主要部内在型関係節」安井稔博士古希記念論文集編集委員会(編)『現代英語の歩み』開拓社.
- 坪本篤朗. 1995. 「文連結と認知図式—いわゆる主要部内在型関係節とその解釈—」『日本語学』14巻3号. 明治書院. 79-91.
- 坪本篤朗. 1999. 「モノとコトから見た文法—主要部内在型関係節とト書き連鎖—」『日本語学』18巻1号. 明治書院. 26-40.
- 吉村紀子. 1994. 「『が』の問題」『変容する言語文化研究』静岡県立大学. 13-28.
- 吉村紀子. 2000. 「分裂文を八代方言からさぐる」『ことばと文化』第4号. 静岡県立大学. 67-84.
- 吉村紀子・仁科明. 2003. 「歴史・方言データからみた分裂文の意味と構造」『日本言語学会第126回大会予稿集』112-117.